

## 学校だより

10月号

<http://www.ed2.city.yamato.kanagawa.jp/s-chu/>

## 「自立」と「共生」について考える

校長 吉田 美佳

木の葉も色づき始め、中央林間小学校では正門から昇降口へのアプローチにどんぐりがたくさん落ちています。そのどんぐりを1年生が生活科の学習で拾っていました。「きせつとなかよし」という単元で、やじろべえやどんぐりゴマなどを作る予定です。緊急事態宣言も解除され、制限を厳しくしていた学校生活も、少しずつもとの生活に戻していけそうです。

この夏は、1年の延期を経て57年ぶりに日本で東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。オリンピック（夏季）は、これまで3度中止になったことがあります。中止の原因は戦争で、オリンピックが開催されるのは、世界が平和だということの象徴だと言われています。今回、感染症により開催が危ぶまれ、世界平和を揺るがすのは戦争だけではないとことを改めて考えさせられました。賛否両論あるなかで開催された今回のオリンピック、多くのメダリストが周囲への感謝の言葉を口にしていて素敵だなと思いました。その中で特に、パラリンピック選手が印象的な言葉を残していました。水泳の一ノ瀬選手は、「もっと人を『個』としてみることができるようになったらいいなって思う。」と言っていました。また、ボッチャの杉村選手の「ボッチャこそ、自分らしさを出せるスポーツだ。」、陸上の伊藤選手の「一生懸命やっている姿を美しいと思いたい。」という言葉も考えさせられました。困難に立ち向かってきたからこそ、心に響くメッセージを私たちに与えてくれました。



学校は、子どもたちの自立を支援し、人との共生を学ぶところでもあります。パラリンピック大会コンセプトの「多様性と調和」と、学校での学びには共通している部分があります。自分を大切にする、人を大切にするとはどんなことか、そして、互いの個性を認め合ってともに生きていくにはどうすればよいか。

学校生活の中で、共に生きるために他者とどう関わっていくか、ということを経験的に考える機会がたくさんあります。例えば、クラスの中に車いすの友だちがいたとします。遠足等校外行事でどのようなコースを計画するとよいのか、グループ活動はどうするのか、どこで食事をするかなど、いろいろな人が共に生きていくために大切なことに気づかせてくれます。例えば、クラスの中でケガをした友だちがいたとします。通常なら体育の授業は見学となりますが、見学しなくても一緒に活動できる方法はないか、ルールなどやり方を変えることはできないかと話し合うこともできます。そう考えることが当たり前になるようになれば、困っている人たちだけが頑張るのではなく、また自分と違う特性を持つ人たちを排除するのではなく、すべての人にとっての生きやすさを考えることにつながります。

将来、グローバル社会や地域社会で活動していく子どもたちには、気づいたり考えたりする機会をたくさん与えることが学校生活の中で大切だと思います。みんながハッピーになれる選択肢を考えよう！と、子どもたちに投げかけること。もちろんこれはとても奥の深いテーマで、簡単に答えが出るものではないでしょう。

多様な個性を認め合ってほしいからこそ、一刻もはやく感染が収まり、心おきなく友だちと関わり合えるような学校生活に戻したいと心から願っています。